

## 8 パニック障害患者における瞬目率の変化 —映像視聴刺激を使用した新しい試み—

小嶋 麻紀・塩入 俊樹\*・細木 俊宏\*\*  
坂井美和子\*\*\*・板東 武彦\*\*\*\*  
染矢 俊幸\*

新潟大学大学院医学研究科  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野\*  
新潟大学医学部付属病院精神科\*\*  
厚生連佐渡総合病院精神科\*\*\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
統合生理学分野\*\*\*\*

自発性瞬目は脳内ドーパミンとの関係が指摘されている。そのため瞬目率についての研究はこれまで精神分裂病等を中心に行われてきた。その中で、精神分裂病患者の瞬目率の上昇が患者の示す不安と関連していることが示唆されている。またうつ病や神経症などでも瞬目率に変化が生じる可能性があり、更に、パニック障害 (PD) とドーパミン機能との関連を示唆させる報告も散見される。

以上より、今回我々は PD における瞬目率について予備的な研究を行った。尚、瞬目率は画像などによって減少することが知られており、映像視聴刺激を用いた。

対象は 8 名の PD 男性患者 (平均年齢: 35.1 ± 6.4 歳) と年齢性別をマッチさせた男性健常被検者 12 名である。診断は、半構造化面接を行い、DSM-IV 診断基準によってなされた。患者群は全て薬物治療中で測定日から少なくとも 1 ヶ月間はパニック発作を認めない者のみとした。

方法については、まず視聴覚刺激として、車載カメラからの映像とその音響を合わせたビデオ映像を用いた。刺激負荷前 5 分間の安静を行い、続いてこのビデオを約 15 分間視聴させ、その間の瞬目を予め固定したハンディーカメラにて撮影し、ビデオテープに収録した。

実験室は室温 22℃・照度 10 ルクスに一定にした。また測定前に Sheehan の不安尺度、Bandelow のパニック障害・広場恐怖評価尺度 (患者用) を施行した。瞬目率の計測については、診断にブラインドの評価者 2 名によって、ビデオテープから

瞬目回数をカウントし、その平均を求めた。

PD 群では、安静時及び視聴覚刺激中を通じて正常被検者 (NC) 群に比べて瞬目率が高かった (2way ANOVA:  $F=5.30$ ,  $p=0.023$ )。また、PD 群では NC 群に比し瞬目率の変動が大きかった。更に、NC 群では安静時の瞬目率は視聴覚刺激間のものに比べて高い傾向があったが、PD 群ではそのような傾向は認めなかった。尚、今回用いた視聴覚刺激の種類と瞬目率との間に有意な関連性や交互作用はなかった。

今回の結果が PD の何らかのドーパミン機能異常を示している可能性が示唆された。しかしながら、最近の研究によって、瞬目率や瞬目反射はセロトニンやノルアドレナリン神経系の関与が指摘されており、上記の神経系の調節異常が指摘されている PD においてはこれらの神経系影響を考慮する必要がある。結果の解釈には注意が必要である。

また、瞬目率は精神的負荷時に増加するとされ、PD では安静時・刺激時を通して精神的負荷が高いことが推測された。今回の対象者はほぼ寛解状態にあったにもかかわらず、このような結果となったことは、PD の再発率の高さと関連しているのかもしれない。

今回は症例数も少なく、予備的な研究であるので、今後、症例数を増やして検討を加える必要がある。

## II. 特別講演

### 「慢性精神疾患の認知・生活障害治療と SST」

福島県立医科大学神経精神医学教室

丹羽 真 一